

久留米市文化財調査報告書 第108集

安国寺遺跡

第 5 次 調 査



1995年12月

久留米市教育委員会

序

福岡県南の中核都市として発展し続けている久留米市は、古くから筑後地方の交通の要所で、経済・文化の中心地として栄えてきました。また、市北部を流れる筑後川は、九州第一の流域を擁し、豊かな自然と人文を育み、流域には太古から人の営み跡や文化財が幾つも残っています。

ここに報告する安国寺遺跡は、納骨堂建設計画に伴って事前に実施した発掘調査の記録であります。境内に隣接して、史跡「安国寺甕棺墓群」が所在するところでもあります。調査の結果、縄文時代の早い段階から生活地として利用されたことがわかり、更には、弥生時代・平安時代・室町時代と何度も集落を営んでいたことが明らかになりました。

本書が埋蔵文化財の理解・普及に多少なりとも寄与し、学校教育や生涯教育の教材として、また、学術研究の一資料として、広くご利用いただければ幸いに思います。

発掘調査に際しまして、多大のご理解のもとご協力いただいた安国寺住職の増山健祐氏をはじめ、関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成7年12月20日

久留米市教育委員会

教育長 桑 野 善 吾

例 言

1. 本書は、納骨堂建設計画に先立って久留米市教育委員会が受託事業として、平成7年度に発掘調査を実施した、久留米市山川神代一丁目所在の安国寺遺跡第5次調査の記録である。
2. 発掘調査は、文化財文化財保護課の富永直樹が担当した。
3. 本書に掲載した図面の作成・製図、写真撮影は富永と松永美弥子・庵直美が行った。調査に関わる遺物・記録類は、久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
4. 本書の遺構実測図の方位は、すべて座標北を示す。遺構の略表記はSDー溝・溝状遺構、SPー柱穴・ピット、SXーその他の遺構を示す。
5. 輸入陶磁器の分類は、福岡市教育委員会 1984『博多出土貿易陶磁分類表』福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊を参考にした。
6. 本書押印の内の、遺物実測図の番号下に記した（ ）内の8桁数字は、遺物登録番号である。
7. 本書の執筆・編集は、富永が担当した。

本文目次

	頁
I はじめに	1
II 位置と環境	1
III 調査の記録	2
IV まとめ	5

I はじめに

1. 調査にいたる経過

久留米市山川神代一丁目2962-2、2966番地に納骨堂を建設計画の安国寺住職増山健祐氏より、平成6年11月9日に埋蔵文化財包蔵有無の確認依頼書が提出された。試掘調査した結果、遺構面を確認し、更には縄文時代の包含層も存在することが判明した。事前の発掘調査の必要性を通知するとともに協議を行い、諸事情により次年度に行うことになった。

平成7年度に入り、調査日程と費用についての協議を重ね、隣接する史跡の関連から、先に確認調査を行った後に、緊急の本調査を10月から実施することで協議が整った。平成7年8月28日に調査の依頼を受け、先に確認調査を9月7日～10月9日まで行った。受託に係る本調査は、10月6日に「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結し、10月11日～10月20日にかけて約40㎡を実施した。

2. 調査の体制

調査に係る組織体制は、次のとおりである。

調査委託：増山健祐

調査主体：久留米市教育委員会文化財保護課

調査総括：文化財保護課長 古賀 幸男

文化財保護課主査 萩原 裕房

埋蔵文化財主査 櫻井 康治

調査庶務：古賀 直喜 試掘調査：岡井 正隆

調査担当：富永 直樹

整理担当：松永美詠子（非常勤）

現地作業：大石マサコ・大塚チヅ子・緒方ヨシ子・

財木美智子・田中 樹子・田中レイ子・

植原 初美・藤木 幸子・丸山 幸・

山崎キヌ子・吉田 常代・渡辺しげ子・

渡邊やつ子

整理作業：荒巻悦子・福田澄子・藤本貴子・龍直美

なお、調査にあたっては、安国寺の住職増山健祐氏、(株)キャス企画設計の矢野英明氏、(株)江藤建設の江藤直之氏のご協力を得た。記して感謝致します。

II 位置と環境

遺跡は久留米市街の東部に位置し、現在の山川神代一丁目（旧山川町神代字池廻・西神代）に所在する。遺跡の北約500mに「筑紫次郎」の異名を持つ筑後川が西流し、その中流域左岸には度重なる氾濫によって形成された自然堤防状の微高地が発達している。遺跡はそのひとつに立地する。旧削平を受けているが、現在の標高は9～10mを測る。

周辺には野口遺跡・松ヶ本遺跡や新府遺跡・道添遺跡・大鳥遺跡などの縄文～弥生時代の生活地が点在し、いずれも本遺跡同様の微高地に立地する。境内の北に隣接して、国史跡「安国寺霊柏集群」があり、弥生時代中期～後期の墓地と祭祀をととした弥生社会の構造を知る貴重な資料を提供している。

安国寺は元弘の乱後に戦死者の霊を弔うために国毎に建立された寺院で、筑後国では暦応2年(1339)開山の神代山万法寺を元とした。本尊は前身の万法寺伝来の建長6年(1254)作の木造釈迦如来座像で、県有形文化財の指定を受けている。境内の北側一帯は中世神代氏の居館が推定されている。

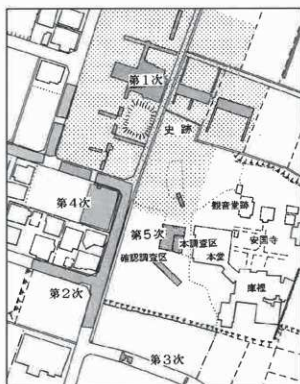


Fig.1 調査位置と周辺地形図 (1/2,000)

III 調査の記録

1. 調査の概要

第5次調査区は旧状が最も保たれた場所で、遺構の良好な残存が推測された。史跡に隣接することもあり、納骨堂計画地に確認調査を先に実施した。その成果を受け、本調査を行い、上層の遺構面調査後に、下層の縄文包含層を掘り下げた。その結果、上層遺構は室町期の溝1状・ピット群、下層は縄文早・前・晩期の土器・石器・焼石多数を検出した。

2. 検出遺構と遺物

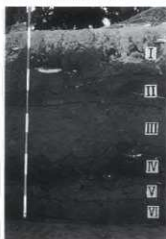


Fig.2 北壁の標準土層

a) 調査区の土層

- I : 客土 (現表土)
- II : 黒灰色砂質土 (旧表土)
- III : 暗黄灰色砂質土
- IV : 黒褐色土 (弥生～平安期の包含層)
- V : 明褐色シルト質土 (縄文期の包含層)
- VI : 茶色シルト質土 (縄文期の包含層)

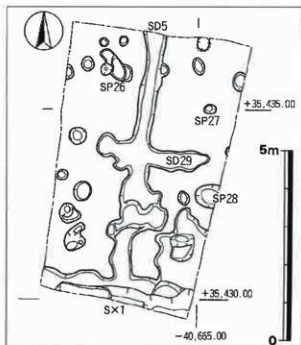


Fig.3 上層の遺構配置図 (1/100)



Fig.4 上層の遺構全景 (北から)

b) 上層の遺構と遺物 (Fig.3～5)

SX1は南壁に接して検出した江戸時代の落込み遺構で、深さ40cmを有する。SD5は中央を南北に貫通する深さ6～11cmの溝。III層から掘られた室町期の溝である。ピットからは縄文土器が出土した。

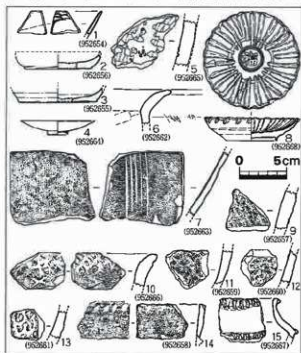


Fig.5 上層遺構・包含層出土の遺物実測図 (1/4)

1はSX1出土の龍泉窯系青磁碗I-6類である。2・3は土師器の糸切り底をもつ小皿と坏で、SD5出土。4は銅製盃で銀メッキの痕跡がある。5は滑石鍋片である。6・7は土師器の壺と播り鉢である。4～7はII・III層出土。8は親音堂跡採集の青磁輪花皿で、時期・産地不明。9～13は早期の楕円押型土器、14・15は晩期の突帯文土器である。9はSD5、10・15はIII層、

11はSP27、12はSP28、13はSP29、14はSP26からそれぞれ出土した。

c) 下層の縄文包含層と遺物 (Fig.6~13)

第V層・VI層上半から縄文土器・石器類・焼石・礫が出土し、Fig.7にその出土分布を水平・垂直に表現した。位置を記録できたのは、縄文土器(早期32点・前期6点・晩期1点)39点、石器類11点、焼石105点、礫7点の総計162点である。調査区内で接合する押型文土器や焼石があり、確認調査区の資料と接合する押型文土器・焼石も認められる。遺物の集中的な出土状況は見られない。



Fig.6 縄文包含層の遺物出土状況(北から)

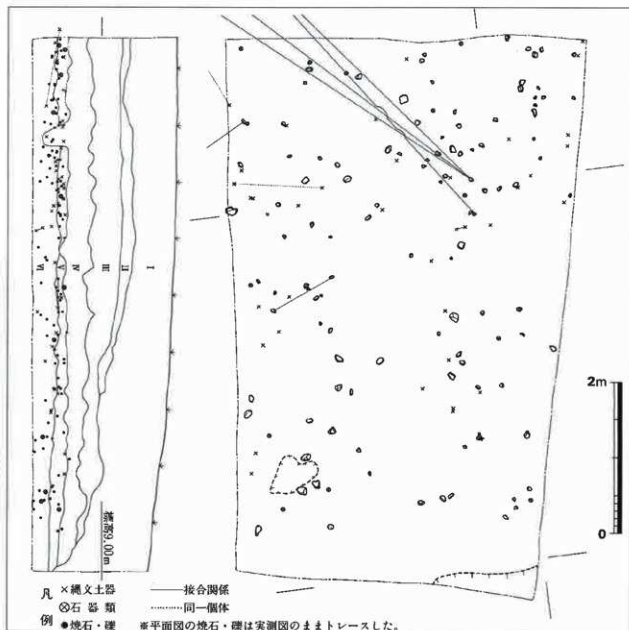


Fig.7 縄文包含層の遺物出土分布図 (1/50)

出土遺物は大半が焼石で、石材は安山岩・片麻岩・片岩・花崗岩に限られる。石器は少ない。16は片岩製の有孔円盤形石器で、重さ70.5g。17・18はサ

ヌカイト製の刮器。19はサヌカイト製の二次加工石器。20はサヌカイトの剥片素材の石核である。21・22は安山岩製の敲石・磨石、23は花崗岩製の敲石。

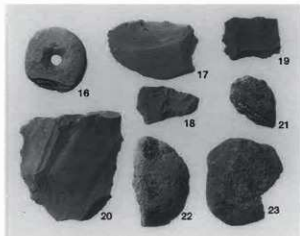


Fig.8 縄文包含層出土の石器 (表)

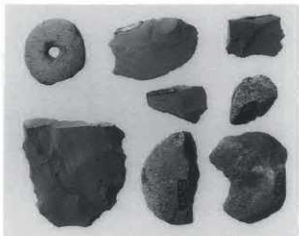


Fig.9 縄文包含層出土の石器 (裏)

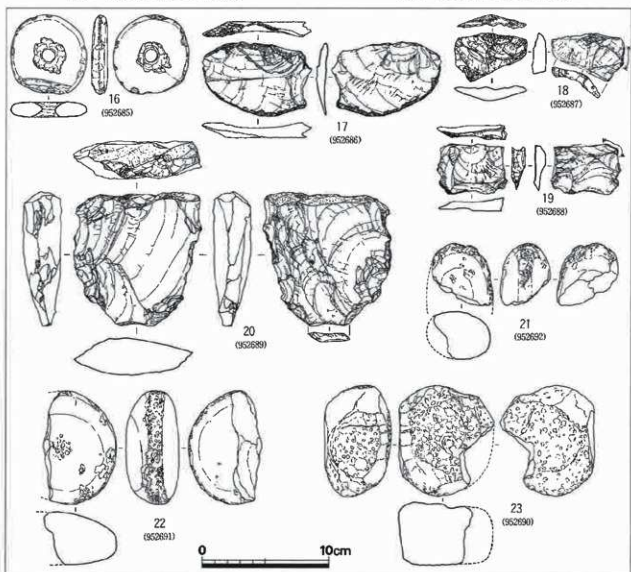


Fig.10 縄文包含層出土の石器実測図 (1/3)

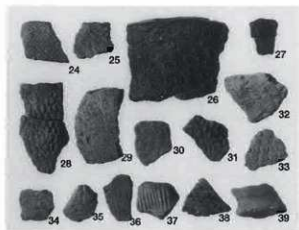


Fig.11 縄文包含層出土の縄文土器（表）



Fig.12 縄文包含層出土の縄文土器（裏）

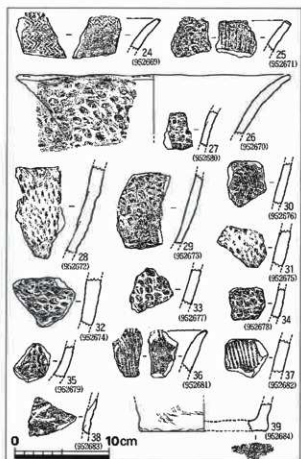


Fig.13 縄文包含層出土の縄文土器実測図（1/4）

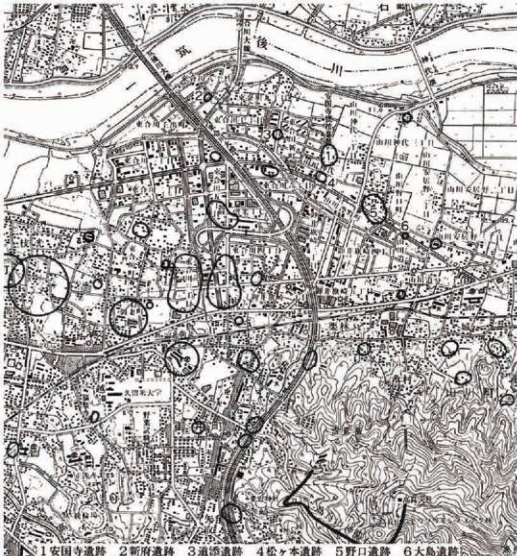
縄文土器は早期の土器が大半を占め、前期・晩期の順に激減する。早期は押型文土器が主で、燃糸文土器・無文土器が若干見られる。24は山形文、25～35は楕円文が押捺されている。口縁部の内側は、24が山形文、25が原体条痕、26が無文である。36・37は燃糸文土器である。38は前期の弧状沈線文で、野口式に類似する、39は晩期粗製甕の底部である。

Ⅳ まとめ

今回の調査は、先に確認調査を行い、その成果を受けた形で実施し、調査面積も約40㎡と少なかったが、上下2枚の包含層と遺構・遺物を検出した。

上層では確認調査に続く室町期の溝を検出したが性格の把握までに至っていない。周辺に検出した深めのピットも、伴伴遺物や面積の制約から建物の柱穴とは断定できなかった。これまでの周辺調査の成果を勘案すると、安国寺の創建や前身の万法寺段階の遺物が比較的目的に付くことから、それらに関連する遺構と見なせようが、将来の周辺調査に期待したいと思う。

下層では縄文早期・前期・晩期の遺物が含まれていたが、時期ごとの生活面の検出には至らなかった。遺物の出土割合は、これまでの第1・2・4次調査の成果と大同小異で、同じ傾向が追認された。確認調査では早期押型文土器文化期の集石遺構が4基検出されたが、その集石を構成する焼石と接合するものも数例認められ、同一時期を示す貴重な事例となった。押型文土器は口縁が外反するものが多く内面に原体条痕を施したり、精門文が大きいことから、田村式～ヤトコロ式段階に相当しよう。石器は黒曜石が少なく、サヌカイトが多用されている。佐賀県多産のもので、10cm大の自然面を残す荒削りの剥片を素材として搬入している。



1 安国寺遺跡 2 新府道路 3 通源道路 4 松ヶ本道路 5 野口道路 6 大島道路



報告書抄録

ふりがな	あんこくじやま
書名	安国寺遺跡 第5次調査
副書名	
巻次	
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第108集
編著者名	富永直樹
編集機関	久留米市教育委員会
所在地	〒830 福岡県久留米市城南町15-3 TEL0942-30-9225
発行年月日	西暦1995年12月25日
ふりがな 所収遺跡名	あんこくじ 安国寺
ふりがな 所在地	あんこくじ 久留米市 城南町久留米市 山川神代一丁目
コード 市町村 遺跡番号	40203 030149
北緯 東経	33度 130度
調査期間	1995.11.11~ 1995.11.20
調査面積 ㎡	40
調査原因	跡骨遺留
所収遺跡名	安国寺
権別	敷布地
主な時代	縄文
主な遺構	溝1条 ピット群
主な遺物	縄文早期の生活地 が確認できた。
特記事項	

安国寺遺跡 一第5次調査一

久留米市文化財調査報告書 第108集
1995年12月25日

発行：久留米市教育委員会
〒830 久留米市城南町15-3

編集：文化財文化財保護課
☎0942-30-9225

印刷：サンシユウブリンティング株式会社